
永遠輪廻 -零-

繭月 悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠輪廻 - 零 -

【Nコード】

N3230D

【作者名】

繭月 悠

【あらすじ】

突然の交通事故でこの世を去った不幸な高校生・守郷神也（17）が、この世とあの世の二つの世界で己の運命と向き合いながら戦っていくお話。

《顕界》そこは生きとし生ける者たち、生命ある者たちが住まう世界。

光や雨が降り注ぎ、大地や自然に恵みを与え、数多の生命が生まれ
いずる“生”の楽園。

しかし、光が満ちる世界があれば闇に染まる世界もある。

この世界とは異なるもう一つの世界。

死しても尚、成仏できぬ魂^{もの}たちが集いし世界——《幽界》

彼らの頭上に降り注がれるのは、永劫の闇に映えし血の如き真紅の
光。光り輝く楽園とはほど遠い場所にある“死”の桃源郷。

天国にも地獄にも逝けぬ生命なき者たちは、そこでどのような
“未来”を巡るのか？

これは偶然と必然が織り成す『運命』に導かれた、一人の少年の大
いなる始まりの物語——。

最期に見たのは、赤い満月だけが輝く星一つない夜空だった。
今までオレが見た中で、一番キレイな色をしていた。

——キキイイイイ………ドンツ………！！

時間が、一瞬止まったような気がした。

もの凄い衝撃が身体に走った瞬間、オレの身体がふわりと宙を舞っ
た。まるで翼でも生えたかのように。

最初に声が聴こえた。だけど、耳鳴りが酷くて何を言ってるのかま
では分からない。誰かが必死に何かを叫んでいる。

一体何が起こったんだろ。目を開けようとしたが、瞼が重くて上

がらなかった。

身体中の節々が痛い。だけど、オレの身体を包み込む生暖かい感覚が、何だか不思議と心地良かった。

……ああ……そつか、オレ……

『人生、何があるか分かったものじゃない』いつか誰かが言っていた言葉。まったくもってその通りだよな。そしてそれを最後に、オレの意識は深い闇の彼方へと連れ去られていった。

……ん……しん……

誰だ？オレを呼んでる……のは……？

「守郷神也っ！」

「は、はいいいっ……って、あれ？」

口元に見事な涎の痕を残しながら、オレはゆっくりと教室内を見回す。他の生徒たちはそんなオレの様子をポカンとした表情で見つめていた。

「返事が良いのはよろしい。だが居眠りは頂けないなあ、守郷？」
そう言つてオレの鼻先に、ビシッとステンレス製の指示棒を突き付ける人物。

「うえっ?!……竜崎、先生……？」

「言い訳なら後でたっぷり聞いてやるから、放課後になったら生徒指導室に来ること……!……いいな？」

「何だ……夢か」

「もおゝりいゝさあゝとおゝ?!」

「え??は、はいっ！」

オレが急いで返事をする、突き付けていた指示棒を鼻先から解放し、くるりと踵を返して再び教壇まで戻っていく。教室内の殆どの

生徒がオレの痴態を見ていたのだろう、口元に手を当てて必死に笑いを堪えていた。

「はあ……」

オレは溜め息混じりに外の景色に目を向けると、先ほど見た夢の光景を思い返していた。

また…あの夢だ……

ここ数日間、毎日のように見る不思議な夢。決まった時間、決まった場所でオレが死に、そして目が覚める。その先に何かがある訳ではなく、ただひたすらそれを繰り返すだけ。

赤い満月、不気味な点滅を繰り返す赤信号、そして…あの声。

— “ ” —

「何なんだよ……あれ……」

所詮は夢。そう割り切ってしまうばいいだけのこと。なのに、どうしても割り切れない。

そんなオレの思いをまるで全て見透かすかのように、暮れかけた夕空に映る赤い満月が、不気味なほど鮮明な輝きを放っていた。

蒸し暑い夏が終わりを告げる頃。この時のオレはまだ、自分に降りかかる“運命”さえ知る由もなかった。

すっかり日も暮れたいつもの帰り道。だけど今日は、少しだけその

“いつも”と違うような気がした。

「くそ、竜崎の奴…何も3時間も説教することねえだろ……っ」

オレは何かと小うるさい担任の顔を頭に思い浮かべながら、いつもより沈んだ気分で見慣れた帰り道を歩いていた。

「それにしてもあの夢……オレの気にしすぎかなあ……？」

先ほど見た夢。あの光景がオレの脳裏に焼き付いて離れない。

「まったく…大体、何だって自分が死ぬ夢なんか見なきゃならないんだよ…!!」

冗談じゃない、などと呟きながら、オレは運悪く赤信号に変わった交差点の前で立ち止まった。

その時、どこか見覚えのある景色に何だか妙な違和感を感じた。暫くしてその違和感の正体に気付いた時、オレは出来るなら自分の記憶が間違いであると思ってしまいたかった。

しかしオレの中にある記憶は見事にオレを裏切り、その記憶とさっきの夢の内容をオレの頭の中で寸分変わらず合致させてしまった。

それは場所、時間、辺りに響く音から、オレの全身を駆け巡る得体の知れない感覚までもはつきりと思い出させた。

赤い信号は不規則な点滅を繰り返し、闇を溶かしたような星一つない夜空には真つ赤な満月だけが煌々と輝いている。

「ははっ……冗談、だろ…?」

冷たい汗が背中を伝い落ちる。オレは鉛のように重くなった足を必死になって動かそうとしたが、足は動くどころかその場に縫い付けられたかのように動かなかった。

「あれは…あの出来事は夢じゃなかったっていうのかよ……っ!!」
死がどういうものか、ある程度は理解しているつもりだった。それでも、今のオレには全く関係のないものだと思っていた。

それが今、自分の眼前に迫って来ているかもしれない。その目に見えぬ恐怖が、更にオレを追い詰めていく。

「あ……ああ……っ!!」

声が出ない。息が出来ない。胸が苦しい。とにかく一刻も早く、この場所から逃げ出したかった。

―楽二ナリタイカ?―

「えっ…?」

オレは一瞬、恐怖のあまり幻聴が聞こえたんじゃないかと思った。

「だ…誰、だ…？」

―ソノ恐怖カラ解放サレタイカ？―

「な…っ?!」

幻聴だと思っていた声が、今度はハッキリと聞こえた。

まるでオレの体内から響いてくるような不気味な声に、オレは恐怖を覚えずにはいらなかった。

「何なんだよ、これ…！一体何だっというんだよ…!!」

そう叫ぶが早いか、オレは無我夢中でその声から逃れようと走り出していた。

いつの間にか雨が降り出していたがもはやそれさえも気に留めず、自分でも何処を走っているのか分からなくなるくらいに、ただひたすらに暗闇の中を駆け抜けた。

「何なんだよ…訳分かんねえよ…っ」

ますます恐怖が増していく今のオレの頭では、もはや状況を冷静に判断する余裕さえなかった。

―呑マレルカ？ソレトモ抗ウカ？―

ふと響いた優しい声。今までのものとは明らかに違うその優しいげな声に、オレは思わず足を止めた。

まるで導かれるかのように無意識に振り返った瞬間、オレの思考回路は初めて考えるということをやめた。

一秒一秒の世界が、まるでスローモーションのように流れていく。

この時、もう既にオレの運命は決まっていたのかも知れない。

迫り来る光が、これから起こる未来を全て物語っているかのように見えた。

――ザアアア…アア…ッ…

冷たい雨が降りしきる夜。漆黒の空に煌く炎のように真っ赤な色をした満月だけが、少年の血塗られた姿を映し出していた。全ての感覚が遠のき、全身の血の気が一気に引いていく。もう助からない、そう思った。

「…こんな所で…まだ…、死にたく…ねえよ……っ…」

“死にたくない”

意識が消える直前。この時オレは初めて、何処にいるかも知れぬ神にそう願った。

D e a d o r A l i v e ?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3230d/>

永遠輪廻 -零-

2010年11月26日06時36分発行